トピックス

乳幼児を育てる母親への野菜栽培による育児支援の効果

―「育 G の会クローバー」での育児支援活動の実践報告―

健康医療学部 看護学科助教　藤本　美穂
健康医療学部 看護学科准教授　今西　誠子
健康医療学部 看護学科講師　夏山　洋子
健康医療学部 看護学科教授　杉山　智春
バイオ環境学部 食農学科特任教授　大城　閑

Ⅰ．はじめに

人間は生涯を通じて、環境に影響を受けながら発達している。舟島は、乳幼児期について生活のすべてを親や主たる養育者といった周囲の大人に依存しなければならず、その人々のありさまによって良きにつけ悪しきにつけ、多大な影響をうけると述べている[1)]。乳幼児期は成長発達が著しい時期であるため、特に環境の影響が人格形成を左右する可能性があると考える。しかし残念ながら、日本のすべての子どもたちが健全に成長する環境が整えられているとは言い難い。木村ら（2001）は「子どもの特性理解の勉強会」により，孤立している母親への継続的支援と父親の育児参加導入の支援の必要性を示唆している[3)]。子どもたちが健全に成長する環境を提供する意味では、育児支援活動の実施と継続が社会にとって重要な取り組みであると考えられる。

研究者らは事業名を「右京子育てこみゅにてぃー“クローバーKGU”」と称し、2015 年度より子育て世代と高齢者・学生をつなげることを事業趣旨に育児支援活動（団体名：育 G の会クローバー）を開催している（以下、育 G の会とする）。2015 年度は計 7 回、2016 年度は計 6 回のペースで、右京区まちづくり支援制度支援事業の助成金を受けて実施してきた。2015 年度の活動では、あめすくいや手のひらスタンプ、京都太秦キャンパスの雨庭の散歩等のプログラムを企画・実施し、支援実施後は保護者とシニアボランティアの参加者全員に毎回、感想を記入してもらうことで支援の評価を行っているが、好評の意見が多かった。2016 年度では参加する親子の数が 10～20 組と安定し、小さな子育て支援の場として育 G の会が周知されてきたといえる。大学周辺の児童館との

連携から児童館祭り等への参加依頼や京都地域子育て支援ネットワークへの参加により、地域に定着しつつある。右京福祉事務所や保健所関係の方々との交流をもち、地域のまちづくり活動の一助となっている。

今回の研究では、参加者のニーズの高かった畑での野菜作りに焦点化した育児支援活動プログラムを育 G の会を通じて実施し、参加した母親への育児支援の効果を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ． 用語の定義

三世代交流（世代間交流）：世代の異なる人が相互に交流し，互いの生活文化や価値観の理解を深めるために行われる活動とする。

シニアボランティア（シニア世代）：一般的な定義は存在しないが，本論文において 60 歳以上で本活動に参加した成人の男女とする。

Ⅲ. 共同研究の成果報告（テキストマイニングによる分析と質的記述的分析）

本研究（テキストマイニング分析とインタビュー調査による質的記述的研究による分析）は本学 2017 年度共同研究（第二種）の助成を受けて実施した研究である。

第 1 はテキストマイニング分析の実施であり、第 37 回日本看護科学学会学術集会で発表した（2017 年 12 月）。本所報にて示す。

第 2 は参加者のインタビュー調査による質的記述的分析である。本研究は同意を得た対象者が妊娠、出産により、日程の調整が困難となったため、現在インタビューの日程調整中である（参加者の研究参加への希望があり、意向を尊重して調整している）。

1. テキストマイニングによる分析

（1）目的

インタビュー調査に先駆けて、2015・2016 年度の事業結果の中より芋掘りと試食の回を取り上げ、参加者の思いを明らかにする。

（2）対象

幼児を育てる世代の父親と母親、60 歳以上のシニア世代の計 9 名

（3）研究方法

1）研究デザイン

自由記述の質問紙調査による記述的研究

2）データ収集

イベント終了後、無記名の感想を独自の専用用紙に直接記入し回収箱に投函した。基本属性の情報は、個人属性（フェイスシート）として、性別、年齢、母親の就労の有無と状況、同居家族、婚姻、妊娠・出産経験、子どもの数等を記入した。

3）分析方法

テキストマイニングソフト（Text Mining Studio 5.1、NTT 数理システム）を用い、高頻度の単語とその単語につながる動詞の構造から内容を分析した。分析機能は「係り受け分析」モードを使った。

（4）倫理的配慮

本研究は京都学園大学倫理審査委員会の承認を得て行った(承認番号 29-8)。研究対象者に対してはデータ収集に際し、研究者が書面と対面にて研究の目的、方法、研究協力は自由意志によること、断っても不利益は生じないこと、プライバシー保護の保証、結果の公表方法等について口頭で説明し、質問紙の提出をもって同意とした。

（5）栽培野菜の種類

9 月に種芋を植え、収穫時期が 12 月の寒冷期である栽培条件や育てやすさ、調理のしやすさを研究者間で話し合い、ジャガイモの品種「アンデス赤」を栽培することとした。この品種はほくほくとして口当たりがよく、加熱すると甘味旨みがあるため、家庭栽培用の野菜として人気がある[4)]。

（6）結果と考察

回収数は 9 名（回収率 100%）であった。記載の内容を分析した結果、複数用いられていた単語は 18 語だった。名詞は 8 語（「子ども」、「芋」、「学生」等）、形容詞は 3 語（「良い」、「楽しい」、「美味しい」等）、動詞は 7 語（「思う」、「触れ合う」、「できる」、「つながる」等）であった。動詞「できる」に接続していた語は 3 語で、係り受け分析により「家・家族・ない－触れ合う・できる」、「芋－試食・できる」となった。芋掘りに対して、形容詞から前向きな内容の単語が多かったため、参加者にとって芋掘りと試食体験は高評価であったことが分かった。また、形容詞の 3 語のうち、「楽しい」を係り受け分析すると「機会・ない」に係っていた。また、動詞の「つながる」は「強い」、「広げる・したい」に係っていたため、繋がりに関しての関心の高さが伺えた。

今回、幼児を育てる世代の親とシニア世代の交流に参加した地域住民は、「普段でき

ない活動を楽しめた」、「家族以外の人と繋がりを広げたい」という思いを抱いていたことが明らかとなった。この背景には、家族以外の他者との触れ合いの少ない現状や自然の中での遊びを経験できる機会の乏しい状況が考えられる。岸川らは 1 歳児あるいは 3 歳児を育てる母親の育児環境について、どちらの年齢でも母親が「遊び場の不備」を困ったこととして挙げていた [5)]。親子が安心して遊べる環境が身近に少ない状況の中で、我々の活動は大学の中庭の自然を生かした他の活動団体にはない企画をし、実施してきたことが参加者の評価につながったのではないかと考える。また、普段できない活動を親子が求める背景には依然、核家族による子育ての社会的孤立の現状があるため、家族のみでできる活動ではなく、屋外で様々な親子と交流できる機会を自然と希望するようになるのではないかと推測する [6)]。育児支援活動提供者として今後、これらの考察を踏まえて、大学内の庭の自然を利用したレクリエーションや、大学祭等の行事に地域住民の協力者を募って、学生、住民同士の交流の機会を提供できる支援の必要性が示唆された。

2.　質的記述的研究による分析（インタビュー調査）

（1）目的

本研究では、2015・2016 年度の事業結果と評価およびテキストマイニング分析を基に、畑での野菜作りに焦点化した育児支援活動プログラム内容の母親に対する支援の効果を明らかにすることである。

（2）対象

京都学園大学京都太秦キャンパスで実施される看護学科の育児支援活動「育 G の会　クローバー」に今年度 2 回以上参加した母親とした。

（3）研究方法

1）研究デザイン

質的記述的研究

2）データ収集

- 研究の趣旨に同意した母親数名を対象とし、それぞれ個別に半構造化面接を行う。
- インタビューガイドに基づき、野菜栽培に参加して良かったことや育児に対する思い、家族へのかかわりの変化等を聴く。
- 面接は 1 回約 60 分で 1 回行う。

- 面接の内容は IC レコーダーに録音する。録音の了解を得た方を研究対象者とする。
- 面接内容の録音記録から逐語録を作成する。
- 対象者の基本属性については、面接実施前に調査票への記入を依頼し回収する。基本属性の情報は、性別、年齢、母親の就労の有無と状況、同居家族、婚姻、妊娠・出産経験、子どもの数等を記入する。

3）分析方法

データ分析は帰納的質的分析とする。対象者の語りの文脈に注意しながら、支援に関連のある文脈を取り出し整理し、内容を抽出する。その後、文脈ごとの意味を読み返し、その意味内容をコード化する。そのコードを相違性および類似性に留意しながら分類し、抽象度を上げてサブカテゴリーとカテゴリーを生成し、野菜栽培を中心とした育児支援活動の効果を検討する。

（4）倫理的配慮

京都学園大学倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 29-8）。研究対象者に対してはデータ収集に際し、研究者が書面と対面にて研究の目的、方法、研究協力は自由意志によること、断っても不利益は生じないこと、プライバシー保護の保証、結果の公表方法等について口頭で説明し、書面にて同意を得る。

（5）栽培野菜の種類

収穫時期や育てやすさ、調理のしやすさを研究者間で話し合い、サツマイモの品種「紅はるか」を栽培することとした。「紅はるか」は比較的新しい品種（2010 年に品種登録）であり、特に蒸し芋にした際に非常に甘くしっとりした食感になる。今回の試食の調理方法（蒸し）を考慮すると、どの世代の参加者にも自然の甘さをじっくりと味わえる可能性が高いと推測しこの品種に決定した。

（6）途中経過（研究の進度）について

1）イベントの実施スケジュール

1 年間で育児支援活動を通算 5 回開催した（表 1）。サツマイモの栽培と収穫をメインテーマにしたのは初回と最終回であるが、どの回にも必ず畑の草抜きや水やりを実施し、参加者がサツマイモの成長を感じ取れるように配慮した（写真 1）。

2）参加者数

すべての回において、親子とシニアボランティアの参加があった。参加数が最多の回は最終回の「収穫と試食の実施」であった。毎回の参加者数の平均は約 24 名であった。

3）収穫・試食の実際（最終回）

参加者数は子どもが 23 名、保護者が 13 名、シニアボランティアが 3 名であった。参加を予約制にした理由は、2015 年度の野菜収穫の回で参加者が予想外に多く（2015 年度 52 名）、対応に時間がかかってしまったため、予約制とした。その結果、参加者は 15 名となった。2017 年度の共同研究では、育 G の会の野菜栽培を継続して複数回参加した親子とシニアボランティアに収穫は先着順で実施することを伝えた。複数回参加した親子を収穫の回に優先参加させることで、継続的に栽培に携わった親子が収穫の回への参加がしやすくなり、母親に提供された支援の効果をより明らかにできると考えたからである。

参加者は学生ボランティアと共に 30 分程度の時間枠で芋掘りを実施した（写真 2）。畑作業では、過去の収穫作業に準じて家族ごとに最低 1 株のサツマイモの苗を掘れるように誘導し、どの家族も必ず芋掘りを経験できるように配慮した。シニアボランティアと学生は親子の収穫補助、芋掘りが終了した子どもの相手や写真撮影等、親子と交流できるように配慮した。芋掘りの後、子どもと学生が中心となって水道水でサツマイモやスコップ、鋤等の道具を洗い（写真 3）、本学学生レストランに蒸し調理をしてもらった。その間（15 分程度）、大城特任教授がサツマイモの由来、品種について小講義し、その後は食育指導員の資格をもつシニアボランティアによる調理法を紹介した。

蒸したサツマイモの試食の際（写真 4）、シニアボランティアと学生には家族の間に座るように声をかけ，自然に世代間交流できるように配慮した。試食の際、希望があれば食塩を使えることを伝えたが申し出た参加者はいなかった。最後に調理前のジャガイモを均等に分け、参加者が持ち帰ると同時に解散の流れとした。参加者の感想として、「子どものサツマイモの育つ行程を見せることができたのでよかったと思います。」や「普段スーパーに並んでいるお芋しか知らない子どもに土の中から採れることを学ばせることができ、とてもいい経験ができました。」という言葉と共に、感謝の気持ちが

表 1　活動内容

回数	実施月	テーマ
第1回	6月	種芋の植え付け
第2回	7月	アロマオイルをベースにした虫除けスプレー作成
第3回	8月	学園大の雨庭で草花や虫の観察
第4回	9月	手のひらスタンプ作成
第5回	10月	サツマイモの収穫と試食

写真 1

保護者とシニア世代から述べられていた。

写真 2

写真 3

写真 4

Ⅳ. おわりに

今回の共同研究は、野菜作りに焦点化した育児支援活動に参加した母親への育児支援の効果を明らかにすることを目的としてきた。まず、2015・2016 年度の育 G の会の野菜栽培を中心とした世代間交流による活動での参加者の感想をテキストマイニング分析から、参加者にとって「芋掘り」と「試食体験」は高評価であったことが分かった。そして、参加者たちの「繋がり」に対しての関心の高さが伺えた。

以上をふまえて、2017 年度の共同研究では野菜栽培だけでなく、手のひらをスタンプ代わりにした工作物の作成や草花・昆虫の観察を活動の中に組み入れ、季節を感じられるイベントも同時並行して展開することで参加者の幅広いニーズに応えられるように企画を工夫した。自然や季節感を保護者が育児支援に求めるのは、京都市右京区の地域性による可能性がある。

母親へのインタビュー調査では、参加者の中でも特に母親の思いの変化や地域性に注目し、母親への野菜栽培を中心とした育児支援の効果について考察していく予定である。

謝辞

本研究の活動に際し、ご協力頂きましたシニアボランティアと親子の皆様、山ノ内地区の関係者の皆様そして本学バイオ環境研究科の院生、看護学科とバイオ環境学部の学部生の皆様、本学教職員の皆様に心から御礼申し上げます。なお，本文中の写真はご本人より掲載の許可を得ています。

利益相反に関する開示事項はありません。

引用文献

1）舟島なをみ：*看護のための人間発達学*，82，医学書院，2013

2）厚生労働省：平成 27 年度　児童相談所での児童虐待相談対応件数（速報値）.（http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html）2016.9.30.

3）木村留美子，津田朗子，五十嵐透子，河田史宝他：子育て支援セミナー受講前後における母親と保育士の子どもに対する意識の変化．*金沢大学医学部保健学科紀要*，24（2）：141-150，2001

4）タキイ種苗株式会社：タキイネット通販　じゃがいも・アンデス赤.（https://shop.takii.co.jp/CGI/shop/search/detail.cgi?item_code=NEA402）2019.1.15.

5）岸川亜矢，河合洋子，上山直美，杉山智春：C 市における子育て環境の実態～育児困難，育児支援についての質問紙調査～.*関西看護医療大学紀要*，1（1）：39-46，2009

6）森礼子，後閑容子：地域主催の子育て支援事業の分析　地域の子育て教室からみる行政保健師の役割．*保健師ジャーナル*，68（9）：800-807，2012